

2014 (H26) 年 11 月 21 日

平成 26 年度 沖縄考古学会 11 月定例会

伊江村カヤ原遺跡 A 地点・ナガラ原第三貝塚の発掘調査成果

玉 栄 飛 道
(伊江村教育委員会)

I.はじめに

調査経緯：県営農地保全整備事業による浸透池建設に伴う緊急発掘調査。

浸透地 3 基の予定地がそれぞれ埋蔵文化財包蔵地「カヤ原遺跡 A 地点」「ナガラ原東貝塚」「ナガラ原第三貝塚」が所在しており、緊急発掘調査を行った。

今回の発表においては、カヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚の発掘調査成果の発表を行う。なお、ナガラ原東貝塚においては一定の調査成果が得られていないため、割愛する。

II.カヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚の位置と環境

(1) 調査地の位置

伊江島は本部半島の西約 10 km の洋上に位置している。昨年調査を行ったカヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚共に伊江島の南岸、標高 10m 以下の海岸砂丘地に所在している。

(2) 自然的環境

伊江島は島の中央やや東よりにある城山（伊江島タッチュー）などの地域でチャート層、その他の地域が石灰岩を基盤層となっている。伊江島の南岸、標高 10m 以下の海岸砂丘地に所在。島の南側にはサンゴ礁が広がる。

(3) 歴史的環境

伊江島の先史遺跡の多くは、島の南岸に所在している。島の南岸東側には縄文後期～弥生並行期の浜崎貝塚が所在しており、南岸西側には縄文後期の西崎貝塚などの遺跡が所在している。

今回調査を行ったカヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原東貝塚、ナガラ原第三貝塚に隣接する遺跡として弥生～平安並行期の遺跡であるナガラ原西貝塚が挙げられる。

III.カヤ原遺跡 A 地点の調査概要

カヤ原遺跡 A 地点はナガラ原東貝塚の東方に隣接して位置している。調査面積は 903.069

m²。5層の層序が確認され、うち1枚の文化層（IV層）が確認された。

(1) カヤ原遺跡A地点の遺構

カヤ原遺跡A地点からは貝だまりが検出されている。いくつかの廃棄ブロックに分けられる可能性があり、現在記録をもとに検討を行っている。

(2) カヤ原遺跡A地点の出土遺物

1.土器

くびれ平底土器が主体。わずかに尖底土器が出土。口縁部は無文のものを主体としているが、有文資料も見られる。くびれ平底土器、尖底土器ともに器形は壺形土器を主体としている。

2.石器・石製品

石斧、磨石、敲石、砥石、石皿、軽石有孔製品など

3.貝製品

貝錘、貝皿、貝匙、貝刃、螺貝製貝斧、貝札など

4.自然遺物

主としてシャコガイ類などの貝類が出土している。自然遺物の総数は現在計測中だが、自然遺物のほとんどが貝類であり、獸骨類は数点のみであった。

IV.ナガラ原第三貝塚の調査概要

ナガラ原第三貝塚は、ナガラ原西貝塚の西に隣接して位置している。調査面積は597.320m²。本調査において、7つの層に分けられ、うち二つの文化層（IV層{弥生並行期層}、VI層{縄文後期層}）が確認された。

(1) IV層の遺構

1.貝だまり

貝だまりはカヤ原遺跡A地点のものと比べて小さな規模となっている。ただし、獸魚骨の出土点数に関して違いが見られ、ナガラ原第三貝塚の貝だまり内からは多くの獸魚骨が見つかっている。

2.イモガイ集積遺構

貝だまりの下部にイモガイ集積遺構が見られた。

(2) IV層の出土遺物

1.土器

尖底土器（浜屋原式、大当原式）のみが出土。器種は深鉢形、壺形、浅鉢形など。

2.石器・石材

石斧、凹石、敲石、磨石、砥石、石皿など。

3.貝製品

貝錘、貝刃、螺貝製貝斧、貝皿、ホラ貝有孔製品、サザエ製品

※サザエ製品に関しては、縄文後期層の遺物において記載する。

4.金属片

青銅と思われる金属片が出土。湾曲した状態からの何らかの製品（容器？）の可能性がある。

5.自然遺物

貝類および獸魚骨類が出土している。カヤ原遺跡A地点とは異なり、獸魚骨類は多く出土している（現在整理中）。

III.VI層直上の概要

VI層直上から埋葬遺構が検出された。当初は1基のみ検出されたが、その後の調査により計3基の埋葬遺構がまとまって確認された。また、埋葬遺構とは別にVI層直上より少數ではあるが遺物が見られた。

(1) VI層直上の遺構

埋葬遺構は3基確認された。いずれの遺構でも土器など時代を計る遺物を確認することはできなかった。出土人骨の調査に関しては、今後予定をしている。

1.埋葬遺構1：土壙墓？

2体分の人骨が埋葬された遺構。調査中、土壙の形状を把握することはできなかつたが、暫定的に土壙墓として報告する。

遺構中からは2体分の人骨が確認された。2体はほぼ接する状態で重なっており、2体の埋葬時期は極めて近いと考えられる。

2.埋葬遺構2：土壙墓（頭骨のみ埋納か？）

頭骨のみが納められた遺構。頭骨は頬の部分を貝と石で挟まれていた。遺構中からはサメ歯状有孔製品も出土したが、VI層を掘削して形成された遺構のため、土壙墓に伴う遺物かは不明。

3.埋葬遺構 3：石棺墓

VI層を掘り込み石棺墓を構築。石棺墓内には一体分の人骨が仰臥伸展葬で葬られていた。左手首にゴホウラ製貝輪が1点着装。

(2) VI層直上の遺物

VI層直上からはカヤバウチバンタ式土器の口縁部片、荻堂式土器の口縁部片が出土している。胎土等から縄文晩期のものの可能性がある。

IV. VI層の概要

VI層からは竪穴住居址、炉跡、大型焼成遺構などの遺構、土器類、石器・石製品、貝製品、骨牙製品などの遺物が出土しており、良好な状態で発見された。

(1) VI層の遺構

VI層の遺構として竪穴住居址、炉跡、大型焼成遺構が検出された。

1.竪穴住居址

竪穴住居址は2基確認。2基とも竪穴内にピットを配置している点で共通しているが、異なる点も見られる。

①竪穴住居址 1

竪穴周辺に石が並べられていたことから、石積みの壁があった可能性がある。竪穴内に焼土面（炉跡か？）、4基のピットが確認された。また、炉跡を竪穴内において確認することができた。

②竪穴住居址 2

竪穴住居址1とは異なり、竪穴周辺に石列は見られない。竪穴内にスロープ状に傾斜する箇所、4基のピットが見られた。

2.炉跡

炉跡は17基確認。一部炉跡（炉跡4など）の直上から土器片や魚骨等が見られたことから、一部の炉跡は調理、加工を行った遺構の可能性がある。今後、他の遺跡出土事例も踏まえながら、検討を行いたい。

3.大型焼成遺構

炉跡とともに、大型焼成遺構が検出。平面形は円形となる。遺構底面に石灰岩の配置が見られるが、熱により石灰岩が溶解、石灰化していた。遺構内からは目立った遺物は見られなかった。現在のところ、用途は不明。

(2) VI層の出土遺物

1.土器・土製品

VI層中から発見された土器は伊波式、荻堂式土器を主体としている。以下はVI層出土土器の分類試案となる。

I群：点刻文などの文様が施された土器（伊波式、荻堂式など）

1類：口縁形状が山形口縁のみのもの（伊波式）

2類：口縁形状が山形口縁+瘤状突起（荻堂式）

3類：平口縁（大山式）

II群：無文で山形口縁を有するもの（伊波式、荻堂式土器など）

1類：山形口縁

2類：山形口縁+瘤状突起

3類：平口縁

III群：口縁部が肥厚するもの（室川式、カヤウチバンタ式など）

1類：口縁部断面が歯ブラシ状となるもの。

2類：口縁部断面が膨らみ、丸みを帯びるもの。

IV群：面繩前庭式、嘉徳I式、嘉徳II式などのその他の型式

また、土器とともに土製品も合わせて出土している。土製品は土器を二次利用した土製品などとなっている。

2.石器・石製品

石斧（小型磨製石斧、ノミ型磨製石斧、局部磨製石斧、磨製石斧、打製石斧）、磨石、敲石凹石、石皿、石錐、有溝石製品、楔形石器、双角状石、礫器、砥石など

3.貝製品

貝匙、螺貝製貝斧、スイジガイ製利器、貝刃、貝錘、貝輪、貝珠、螺貝製貝斧、サザエ製品、垂飾品、サメ歯状製品、タケノコガイ有孔製品、パイプウニ線刻製品など

サザエ製品に関して

VI層からもサザエ製品が出土している。出土数はIV層よりも多く、約1万点出土している。サザエ製品に関して、奄美大島の小湊フワガネク遺跡や根瀬部集落遺跡群において類似したものが出土している。現段階では以下のように分類を行っている。

I類：自然品 II類：荒割 III類：完成品 IV類：使用段階 V類：製品使用後

VI類：軸を有するもの

4.骨牙製品

尖頭状骨製品、ヘラ状骨製品、垂飾品、簪状製品、蝶型骨器

5.自然遺物

貝類はチョウセンサザエ、シャコガイ類、スイジガイ、ヤコウガイ（殻、蓋）などが確認され、動物遺体は今後同定作業を進める予定であるが、魚骨、イノシシ、ウミガメ類などが見られた。

V.まとめ

カヤ原遺跡 A 地点では、弥生～平安並行期のくびれ平底土器期を主体とする遺物包含層が確認され、遺構としては複数の貝だまり、遺物としては土器の他に石器、貝製品が出土した。

ナガラ原第三貝塚では、IV層（弥生並行期の遺物包含層）とVI層（縄文時代後期を主体とする遺物包含層）が確認された。また、層序自体は確認することが出来なかつたが、VI層直上において縄文時代晚期～弥生並行期と思われる遺構が確認された。

今後の課題として以下の点が挙げられる。

- ・近隣遺跡（ナガラ原東貝塚、ナガラ原西貝塚）の出土状況との比較検討
- ・石器、貝製品、石材、貝類などから地域間交流の検討
- ・ナガラ原第三貝塚の埋葬遺構の時期及び埋葬人骨の形質人類学的特徴の把握
- ・ナガラ原第三貝塚VI層の遺構群と遺物との関係の検討
- ・ナガラ原第三貝塚VI層の当時の地形の検討

今回、カヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚において時期、様相が異なる内容が見られた。今後、弥生～平安並行期の遺構、遺物の出土状況に関しては熊本大学考古学研究室によって行われたナガラ原東貝塚やナガラ原西貝塚の調査成果を踏まえて、縄文時代の状況に関しては過去に伊江村で行われた発掘成果などを踏まえて資料整理を進めていきたい。